

学園点描

朝校門に立っていると、ひょうが降ってきました。桜が咲くまではまだ早いようです。

《H学園》

NO.2

R7. 4. 16

担当：校長

寒くて、大粒の雨の中でも、見守り隊の方々があちらこちらに立って、子どもや中学生たちの安全を確保してくれています。ありがたいことです。4月23日（水）には1年生から6年生までの児童と見守り隊員の方々との顔合わせを予定しています。

4月のドキドキ

毎日どこかで、子どもが泣いたり、気持ちをうまく伝えられずに困ったりしています。そのたびに、職員室から先生がかけつけ、話を聞きながら、子どもたちの心を少しずつ落ち着けています。

新しいスタートは、どの子にとっても、自分なりに不安とたたかいながらの一步のようです。



わたしも、できるだけ毎日、校舎を歩いて子どもたちの様子を見に行っています。途中、教室前の廊下には、清掃で使用する雑巾掛けのスタンドを見つけました。学校生活では雑巾がいろいろな場面で必要になります。本校でも、PTO総会の折にご家庭への雑巾提

供のご協力をお願いするつもりです。その際は、よろしくお願いします。

さて、廊下に掛かっている雑巾を見ていると、自分の小学生時代のことを思い出しました。

わたしが5年生のときのクラス替えでは、初めて会うクラスメートばかりでした。それは山形県で一番大きな小学校に在籍していたからです。担任の先生も、どこか怖そうで、4月はまさに“ドキドキの連続”でした。

そんな中、恐そうな先生から「明日までに雑巾を1人1枚持ってくるように。家の人に縫ってもらってください」と言われました。当時は、今のようにお店で簡単

に買える時代ではなく、雑巾は家で縫って用意するものでした。

すると、隣の席の女の子がすくーッと手を挙げました。そしてこう言ったのです。

「家では、どうしても雑巾を縫うのが難しい状況なんです。」

静まり返る教室の中、彼女の言葉はとても真っ直ぐで、凜としていました。

先生は少し考え、

「では、その子の分も縫ってきてくれる人がいたら、助かるな」と言いました。

みんな初めて会ったような人ばかりで、その子のことなんて知らない人ばかり。みんなキョロキョロ、どうしていいのかわかりません。その女の子も、申し訳なさそうに下を向いてしまいました。

家に帰って母に頼み、自分の分とは別にもう1枚縫ってもらいました。

翌朝、教室に行くと、その女の子の机には、
たくさんの雑巾がそっと置かれていました。

どの雑巾も、誰かのやさしさが詰まった、真新しい白い雑巾でした。

「ありがとう。」女の子がにっこり笑顔で返してくれました。

教卓では、あのおっかなそうな先生が、やさしい笑顔の先生に変わっているんです。



4月のドキドキの後に来たのは、やさしさのニコニコでした。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp